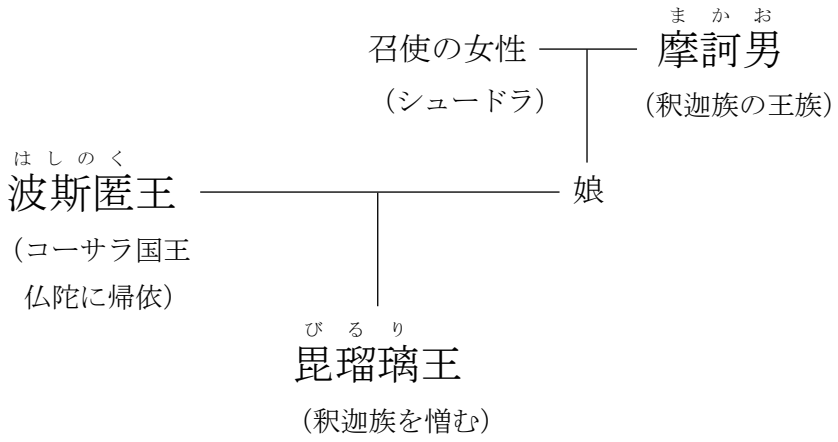
釈迦族の滅亡と救われ

小説「阿難」を読む No.2

尾崎晃久



バラモン教に基づく４つの階級

・バラモン（司祭階級）

・クシャトリヤ（王族・武士階級）

・ヴァイシャ（庶民階級）

・シュードラ（隷属民）

毘瑠璃王と釈迦族

お釈迦様は人々から、釈迦牟尼世尊と呼ばれていました。釈迦牟尼とは「釈迦族の聖者」という意味です。本名はゴータマ・シッダールタといい、元々釈迦族という一族の王子でした。

釈迦というのは個人の名前ではなく、一つの部族の名です。釈迦族は、現在のインドとネパールの国境付近の迦毘羅城という所に、都を置いていました。

当時のインドは、大小さまざまな国が存在し、特に十六大国と呼ばれる国がありました。

その中でも大きかったのが、一つはガンジス川の下流域に栄えたマガダ国、もう一つは中流域にあったコーサラ国という国です。このコーサラ国に、有名な祇園精舎がありました。コーサラ国には、波斯匿王という王様がいて、仏陀を信奉していました。

釈迦族にも王族がいましたが、独立国ではなく、大国であるコーサラ国に服属していました。

波斯匿王の後、次男の毘瑠璃王という人が、三十に満たない若さで王位についたのですが、この王様が、釈迦族を攻め滅ぼすという出来事が起きます。

五井先生の「小説 阿難」（白光出版）の第三部は、毘瑠璃王が、釈迦族を討伐するために出兵することを、家臣に命じる場面から始まります。この時、コーサラ国の大臣のマスラという人が出兵に反対します。

篤い仏教徒だったマスラは、なんとかして釈迦族を救おうとし、主君である毘瑠璃王に対して、「何の反抗もしていない釈迦族を討伐するのは、大国の在り方ではない」と進言しますが、烈しい気性の王は、激高し、耳を傾けようとしませんでした。

マスラは、「それ程の堅いご決意なれば、もうお止めは致しませぬ。ただ願わくば、老人女子、身分の低い者の生命はお許し下さるよう…」と、表面上は出兵に同意しながらも、お釈迦様にお願いすれば、この暴挙を止められるはずだと思っていました。

マスラの使者の来訪を受け、お釈迦様は、釈迦族救済のため、従者の阿難（釈迦十大弟子の一人）を伴っ

て迦毘羅城近くに往かれて、木陰まばらな一本の木の下に座っておられました。

阿難は釈尊の従弟です。「何故に毘瑠璃王は我が親族の釈迦族を討伐なさろうとなさるのですか？」と問う阿難に、世尊はその理由をお答えになります。

コーサラ国の先代の波斯匿王は、仏教徒であることを誇りにし、如来の出生地である釈種の女性を妃となし、間柄を深めたいと思い、釈迦族にそのことを申し入れました。ところが、釈迦族の王族たちは、自分達の出身は由緒正しきものと自負していたので、伝統ある釈種の王族の末を、他種族の栄えのために送ることをよしとしませんでした。

そこで一計を案じ、釈迦族の王族の摩訶男という人と、召使の女性（奴隷階級シュードラ）との間に出来た美しい娘がいたので、その娘を、釈迦族の王族の正室の子だと偽って、波斯匿王の妃としたのです。

当時のインドは、バラモン教（古代のヒンズー教）に基づく階級社会で、四つの階級に分れていました。

一番上がバラモン(司祭階級)、次にクシャトリヤ(王族、武士階級)、そしてヴァイシャ（庶民階級）。最下層がシュードラ（隷属民）で、上位の三つの階級に仕え、差別的な待遇を受けていました。

そのシュードラの女性の娘と、波斯匿王の間に生まれたのが毘瑠璃王だったわけです。

そんなことはつゆ知らず、毘瑠璃王は子供の頃、母の故郷である迦毘羅城に出かけました。

その時、釈尊の説法のための講堂が建設中でした。毘瑠璃王子が講堂の縁に座ると、王子の出生を知っていた釈迦族の人々は、王子が立ち上がるや否や、水で浄めたのでした。神聖な講堂に卑しいシュードラの子が座ったから、浄めようと思ったのでしょう。人々からは王子を崇ぶ何等の色もありませんでした。

やがて王子は事の真相を知り、激怒してコーサラ国の都に帰りましたが、波斯匿王もその事実を知り、王子と母を一間に幽閉し、釈迦族討伐の軍を立てようとしました。しかし釈尊の説法によって、王子も母も許され、釈迦族討伐も立ち消えとなりました。

それ以来、毘瑠璃王子は、自分を奴隷の子として侮

辱した釈迦族に対する憎悪の想いを募らせ、王位につくと、今こそ積年の恨みを晴らす時だと、釈迦族を討伐しようとしたわけです。

お釈迦様は、迦毘羅城滅亡の因となり、毘瑠璃王の運命を業の波の中に押し流してゆく最大の因は、四つの階級的烈しい差別によるのであり、「沙門生活の中において、この階級制をはっきり否定し、本心開発の程度に従って、長幼の差をつけているのは、生命こそ人間のすべてであり、この生命を大きく生かしているか、小さくより生かせぬかによって、人の価値の定まるものであると思うからである」と阿難に説かれます。

この時代のインドの人々は、身分制度にとらわれる想いが強く、ただ、王族の階級であるというだけで、偉い人だと尊び、シュードラであるというだけで、卑しい人間だと蔑む想いが強かったのです。

お釈迦様は、この世の階級によって、人間の優劣を決めて差別することを否定されました。人間は、みな仏の子であって、生命において平等である。仏の生命（本心）をどれだけ大きく現わしているか否かによって、その人の価値が決まるのです。

バラモンや王族の階級であろうとも、想いや行いが卑しい人は偉くはありません。その反対に、シュードラであろうと、業の想いをなくして、本心の神の御心を生活態度の中に現わしている人は、みんなから尊ばれるべき聖なる人であります。

現在の日本では、身分制度は存在しませんが、社会的に成功して地位が高い人は、そうでない人より、自分は偉いように思うことがあります。しかし、そんなことは真理の世界では通用しません。どれだけ自我の想いをなくし、行いの中に神の御心を現わせているか、それだけが神様の世界では問題になるわけです。

「阿難よ、我れ肉身を釈迦族によって受けたことにより三度びは毘瑠璃王の進路を止め、釈迦族の滅亡を救わんと思うが、それ以上は彼等の本心開発をかえって妨げることともなるので、彼等同士のなすに任せることと致す」釈尊がこう言われた時、彼方より毘瑠璃王の軍の馬蹄の響きが近づいてきました。

毘瑠璃王は釈尊の姿に気づき、暑い時刻に木陰のま

ばらな木の下にいることを不審がり「あちらの方にある陰の濃い樹の下にお座りなされたら如何でございましょう」と恭しくすすめました。

毘瑠璃王にとっては、お釈迦様は、自分がシュードラの子であるとわかった時に、王子としての地位どころか、肉体生命さえ失いかねないところを助けてくれた恩人でした。

「大王よ、木陰は如何に密であろうとも、暑気を防ぐのみで心の和みにはならぬ。人はみな親族の陰に入りて心の和みとするものである……」

毘瑠璃王は、仏陀が釈種の出であることを悟り、どきっとしました。さすがに、大恩あるお釈迦様の言葉を無視することができず、「相わかりました」と返事し、王は軍を引き返していきました。

釈尊は阿難に「毘瑠璃王は明日はまたこの道を進軍して来るであろう。必ず二度三度来ることであろう。釈種の宿縁は、毘瑠璃王によってその果をはたし去るもののようである」と言われました。

お釈迦様は、三度は王を止めるが、それ以上は彼等同士のなすに任せる、と仰っています。何故、ずっとお止めにならないのか、と考えるのは肉体人間の浅はかな観方なのでしょう。

毘瑠璃王は、お釈迦様の説く真理を素直に受け入れることができる心境ではありませんので、無理に止めても、ますます憎悪の想いを募らせるだけでしょう。また、釈迦族の方も、過去からの宿縁（業因縁）が、いつまでも消えないで残ったままの状態になってしまいます。それでは、双方の本心開発にプラスしないわけです。

釈迦族は、先代の波斯匿王の時に、滅ぼされていてもおかしくはありませんでした。もし今回、攻められなくても、いずれ何らかの形で、自分たちの業をはたさなければいけなくなるわけです。

過去に毘瑠璃王に差別的な対応を取ったことだけではなく、釈迦族がこの世で栄耀栄華を極める中で、神の御心から外れた行いをして、種々と業を積んでしまっていたのでしょう。今まさに、釈迦族の業生が大きく崩れ、消え去っていこうとしているのでした。

摩訶男の嘆願

お釈迦様の予言通り、毘瑠璃王は三度進軍して、釈尊の姿を見て三度引き返しましたが、四度目には迦毘羅城にむかって、怒涛の進撃をしていきました。

釈迦族は、弓矢の名手が多くいましたが、お釈迦様の教えを信じている者が多かったので、進撃してくる王の軍隊を射殺そうとはせずに、城に近寄らせまいとして、わざと急所をはずして射撃していました。

大臣のマスラは、城内の人々を助けたいと思い、王から〝抵抗なく開門致せば、重立った二、三の者の処刑だけで、後の全員を許す〟と約束を取り付け、城に向って「この城門をすみやかに明け放ち、我等に手向かうことなく軍門に降らば、我等何を好んで、釈種全員を殺戮することをなさん」と大声で叫びました、

釈迦族の王族たちが集まって話し合い、マスラが仏弟子であることを知っていたので、その言葉を信用し、城の門を開けることにしました。

マスラは、〝釈迦牟尼世尊、何とぞ釈迦族の生命をご守護下され〟と一心に祈っていました。しかし、毘瑠璃王は、早く開門させたいと思っていただけで、彼との約束を守る気はありませんでした。

門が開けられると、毘瑠璃王は馬に乗ったまま、城内に入っていき、釈迦族の人たちの顔を見ると、むらむらと癇が昂ぶってきて、持っていた剣で、釈迦族の長老（王族）の一人を斬り捨ててしまいます。

これを見て毘瑠璃王の軍が、釈迦族の軍に斬り込んでいきます。マスラが必死に止めようとしますが、毘瑠璃王は「釈迦族全員を皆殺しにして差し支えないぞ！」と命令を下し、激しい戦闘がはじまりました。

城内が血の海となる中、一人の釈迦族の長老が、武器を持たぬ無抵抗の姿で、大王の前に進み寄りました。それは毘瑠璃王の祖父の摩訶男でした。

釈迦族を憎悪していた毘瑠璃王も、摩訶男のことは祖父として特別に思っており、瞬間、憎しみを忘れ、懐かしさが胸に込みあげて来るのでした。

「大王様、このわしに免じて、暫く城内のものの殺戮をお止め下され、そしてわしの話を一言おきき下され」

哀しみ溢れた声にうたれ、王は祖父の話を聞きます。

「私只今より釈迦族の罪業の浄めのために、あれなる湖水にて、沐浴致したいと存じますが、その間における釈迦族の出入りを自由になさせて頂きたいのでございます。この老摩訶男の最後の願い、何とぞ何とぞおききゆるし下さりますよう願い上げます」

毘瑠璃王は、摩訶男の嘆願を受け入れ、彼が湖の中に入っている間は、戦闘が止められ、釈迦族の人々が城の外に逃げることができる状況になりました。摩訶男は、みなが見護る中、湖に静かに入っていきました。

場面は変わり、その頃、釈尊は阿難を伴って、迦毘羅城近くの小川の辺りに立っておられました。

阿難からすれば、城の中には、自分の親族や知人が多くいて、故郷が今まさに滅びゆこうとしているのですから、普通であれば心穏やかではいられません。

城内が気にかかる阿難に対して、「阿難よ、宿業の消えゆく時には、その業の崩れゆく姿が現われるもの、釈迦族の上には、今その時が来ている。消えゆく宿業を抑えんとすれば、益々烈しい崩れ方をなす。如来は法を知るが故に、この世における如何なる縁ある者に対しても、その現象の姿の悲哀のために心を乱すものでもなく、その現象の悲哀を、本心本体と異なる消えゆく宿業の姿と知るが故に、敢えて止めることをしない。ただ、如来のなすことは、仏の慈悲の光を照らして彼等の本心開発を援くるのみである。

阿難よ、沙門は娑婆世界を、本心開発の場と心得、そのためにのみ働かねばならぬ。迦毘羅も釈迦族も、そなたに深き縁をもつとはいえ、沙門たるものは、消えゆく宿業の悲惨なる姿に心を把えられ、その出来ごとが、本心開発のための一事であることを忘れ去るようではならない」とお釈迦様は説かれます。

私たちは、自分の家族や親しい人たちの身に、不幸、災難が現われてこようとする時、気の毒に、かわいそうに思うあまり、心を乱してしまうものです。

自分自身のことなら、自分の身にどんなことが現れ

てきても、消えてゆく姿だと思って、守護の神霊の感謝に切り替えて、不動心でいられる相当心境が深いような人でも、自分が愛する家族や友人が、不幸な状況にあるのを目の当たりにすると、かわいそうにと思うあまり、悲しみで胸がつぶれそうになって、動揺して、感情が激しく乱されてしまうことがあります。

そういう時、ここでお釈迦様（五井先生）が仰っている真理を私たちは思い起こさなければいけません。

娑婆世界（煩悩や苦しみの多いこの世のこと）は、本心開発の場であります。人間は、毎日、何事もなく、平穏無事で過ごせたら、それでいいというものではありません。過去世からの業を消し去り、本心の神の子の姿をまっすぐ現わすために、人間はこの世に生れてきているわけです。

愛情で、かわいそうにと思うのは無理のないことですが、私たちは現象の悲哀なる出来事にとらわれるあまり、過去世からの業因縁が不幸や災難という形で消えてゆくことで、その人たちの本心が開かれ、真の救いに導かれていくという根本の真理を見失うようなことがあってはなりません。

その人たちの本心本体が、苦しんでいるわけでも、悲惨な目にあっているわけでもありません。それは、本心とは異なる、宿業の消えてゆく姿なのです。

「宿業の消えゆく時には、その業の崩れゆく姿が現われるもの。消えゆく宿業を抑えんとすれば、益々烈しい崩れ方をなす」とお釈迦様は仰っています。

過去世からの業因縁が、表面に消えてゆく姿として現れてくる時、それを無理に抑えようとすることは、業をまた中に押し戻してしまうことになります。

抑えるというのは、業が消えたことにはなりません。潜在意識の中に蓄積されていた業因縁が、消えてゆく姿として、表面に現れてこようとするのを無理に抑えていると、中に業がギューッと圧縮されたような状態になりますので、いつか抑えきれなくなって、これまで無理に抑えていた反動で、余計烈しい現れ方になってしまうわけです。

その後、「如来のなすことは、仏の慈悲の光を照らして彼等の本心開発を援くるのみである」と仰っていま

すが、私たちが世界平和の祈りを祈って、他の人の天命完うを祈るのも、同じことです。

私たちは、身近な人が苦しい立場にある時、情の想いで、〝こうなってほしい、ああなってほしい〟とあれこれ願います。

そういう想いも、みんな〝神様御心のままに〟と全託してしまって、〝世界人類が平和でありますように、守護霊様、守護神様有難うございます。〇〇さんの天命が完うされますように〟と祈るわけです。そうすると守護の神霊、五井先生の慈愛の光が、相手に流れて行って、その人の本心開発を援助することになります。神様が必ず一番良いように導いてくださいます。

情に流され、現象の悲哀なる出来事にとらわれ、自らも因縁因果の業の渦の波に巻き込まれて、苦しんでいたのでは、相手の救いにはなりません。

やがて迦毘羅城から逃れてくる人々が次々と、お釈迦様のもとに近寄ってきました。釈尊に気づき、自己の不運を訴え、毘瑠璃王の不法を責める者もいました。

「自らの不運をかこってはならぬ。自らを滅ぼすものは、敵と見ゆるその者ではなくして、自らの中にある、過去世からの業因縁のなせるわざである。今そなたらが不運と見ゆるその姿は、過去世からの業因縁の解き放たれてゆく姿であって、そなたらの中にある仏性の開発されてゆく姿である。（中略）そなたらが自らの不運を、嘆きかこつことは、解き放たれ、崩れさらんとする業因縁を、声高々と呼び戻しているに等しいのである」と、お釈迦様は彼らの前生からの因縁を説き明かして、人々を光明心に立ち還らせておられました。阿難は、世尊の大慈悲のみ心に涙しながら、他国に落ちゆく人々の開運を念じるのでした。

私たちは、〝あの人が、こんな嫌なことを自分にしてきた。あいつがあんなことをしたから、私がこんな不幸な目にあった〟と思います。しかし実際には、自分の身に現れてくる不調和な事柄は、自分の中にあった過去世からの業因縁が、現れては消えてゆく姿です。

私も、自分自身のこれまでの一つひとつの体験を通して、そのことを学びました。あの人はどうして、私にこんな嫌なことをするのかと、人を悪く思って怨む

ということもありました。

しかし、世界平和の祈りを祈り続けて、今になって思うのは、〝他人が自分に対して嫌なことをしてきたのでもなんでもなかった。すべて、元々自分の中にあったものが、縁に触れて、眼の前に現れては消えていっているだけだった。そのことによって、私の本心が大きく開かれていったんだなぁ〟ということです。

せっかく、過去からの業因縁から解き放たれて、本心が輝きわたろうとしているのに、その消えてゆこうとする業をつかまえて、私は不幸だと嘆き、俺がこんな目になったのは、あいつのせいだと、いつまでも怨み続けていたのでは、消えてゆく業の波をまた自分の中に呼び戻してしまうことになります。それだと、いつまでも業因縁の波の渦の中にいることになります。

嘆く想いも、怨む想いも、共に、消えてゆく姿と思って、世界平和の祈りに入れてしまえば、業は神様の光の中で消えていって、再び、自分に戻ってくることはありません。そのことによって、その人の、その後の人生は光り輝いたものになっていきます。

摩訶男（まかお）の大犠牲

摩訶男（まかお）が、いつまでたっても湖から出てこないので、毘瑠璃（びるり）王の命を受けて、一人の武将が湖に飛び込み、しばらくして摩訶男（まかお）の体を抱いて戻ってきます。摩訶男（まかお）はすでにこと切れていました。

毘瑠璃（びるり）王は、「私がうかつであった。わしが不覚であった」と涙を流して哀しみますが、心が落ち着いて来ると、祖父がどのように死んでいたか尋ねます。

「大王様、それがまた、何んというお見事な最期でございましたでしょう。私は、私は人間がこんなにも立派に死んでゆかれたのを、未だかつて見たことはございません……。摩訶男（まかお）様は、釈迦（しゃか）族の者を一人でも多く助けたいために、ご自分の体を、出来得る限り、長い時間、水中から浮かび上がらぬ方法を取られたのでございます。

大王様、大王様の祖父君の摩訶男（まかお）様は、湖の底にあ

った、木の根にご自分の髪の毛を結びつけられ、自らを水底に縛りつけてしまわれたのです。どんなに苦しくなっても浮かび上がれぬようにご自分でご自分を水底にくくりつけられたご覚悟には、私、私の魂の震える程、打ち驚き、感激致したのでございます。

大王様、摩訶男様の大犠牲のみ心を何卒おくみ取り下さいますよう、衷心からお願い申し上げます」

涙を流して語る武将の言葉に、毘瑠璃王は自分が大きな誤りを犯したことを悟り、マスラに、「釈迦族の者すべてを許してやるよう伝達してくれ」と告げます。

王とマスラが、摩訶男の方に眸をむけると、先程まで苦しそうであった死顔の口元が微笑しているように見え、二人で思わず顔を見合わせたのでした。

自ら生命を断つことは、基本的には善いことではありません。五井先生は、「自分の生命だから、自分の好きにして良いと思うかもしれないけれども、そうではなく、神様から頂いた生命、神様の生命なんです。自分の生命だと思って、勝手なふるまいをしてはいけない。死ぬ必要が全然ないところで、死んでいくのは立派ではない」と仰っていました。

しかし、摩訶男の場合は、自分の肉体生命を投げ出すことで、多くの釈迦族の人たちの生命を救ったことになりますので、自分の生命を、他の人々のために大きく生かしたのですから、永遠の生命を輝かせた愛の行為になるわけです。

「摩須羅、祖父の立派な最期には、わしも頭の下がる思いがする。惜しい人を死なせてしまったが、わしへの無言の教訓である。わしは今改めてそなたがわしに、今日の軍事を思い止まらせようとした心が、よーくわかった。祖父といいそなたといい、仏陀への信仰に生きるものの境界が羨ましい……」

毘瑠璃王は、言葉でいくら言われてもわからなかったわけですが、愛する祖父が、肉体生命を投げ出して、お釈迦様の教えを身をもって示したことで、本当に胸に響いて、改心したわけです。

王の軍が迦毘羅城を立ち去った後、マスラは、後始末のために、その場に止まっていました。〝摩須羅は幾多の屍の前に立って、思わず眼を閉じ合掌し、心の

中で釈迦牟尼仏を念じていた。釈迦牟尼仏のみ心が、摩訶男を動かし、あの大犠牲心を発揮させて、釈迦族の絶滅を救われたのである、と仏陀世尊のみ力に感謝の念を捧げていたのである〟と書かれています。

迦毘羅城は滅亡しましたが、釈尊の大慈悲心、そのみ心を受けた摩訶男の大犠牲によって、最小限度の消えてゆく姿の現れで済んだのでした。平和の祈りを祈っておりましても、過去世の因縁の消えてゆく姿として、様々な不幸が現われてくることもありますが、守護の神霊、五井先生の慈愛によって、小さな形で超えていくことができるのは間違いのないことです。

やがて迦毘羅城に釈尊が阿難と共に来られます。釈尊は、摩訶男の遺骸の前で如来印を結ばれ合掌され、「摩訶男は仏の教を純真に素直に信じ、その深い信によって、その身を最大に生かしたる天晴れなる者であった。彼がその肉の身を放棄したるは、釈迦族に対する深い愛念による。彼はその肉の身を、釈迦族救済の犠牲となし、その犠牲の精神によって、自らの意識（魂）を天界に住まわせることが出来得たのである。

摩訶男は今、如来の光明の中において、肉体身を離脱せる意識にはっきり目醒め、その生命体（霊魂体）の行きつく先の清らかにして正しき処なるを知り、歓喜しつつ、我れに合掌礼拝している」と語ります。

私たちは、このような自己犠牲の愛の行為を聞くと、深く感動しますが、「自分も身を犠牲にして人を救わなければいけない」と思う必要はないと思います。

宗教をやる人の中には、自己犠牲が尊いのだと思って、自分は本当は嫌で辛いのだけれども、そうするのが良いのだと思って、辛いのを我慢して、自分の身を犠牲にすることもありますが、それは心境としてはあまり高くないようです。

本当に偉い人というのは、そうしなければいけないというのではなくて、そうせずにはいられなくて、人を救いたいという愛念だけで、自然に、神の御心のままの愛の行為をすることができるわけです。

私たちはなかなか摩訶男のような行為ができるものではありませんし、そもそも、そんな状況に置かれることもないでしょうが、五井先生は、自分を犠牲にし

なくても、普通の人が、当たり前の生活の中で、大勢の人を救うことができる行法として、世界平和の祈りを提唱して下さったわけで、本当に有難いことです。

しかし、私たちも、いずれは、肉の身を離れることになるのは確かですので、人間というのは永遠の生命であることをはっきり知って、安心立命して、肉体を離れるような境地にならないといけません。

お釈迦様は生き残った釈迦族の人々に、「釈種の人々よ、そなたらの中には、親兄弟に死別せるもの多くあらん。そなたらはそれらの死を長く嘆いてはならぬ。肉の身は一つの現われに過ぎぬもの、そなたらの親兄弟の生命(いのち)は、今肉の身を離れ、そなたらと別離はせるも、消滅せるにあらず、より真実なる姿に近づきて、その生命を働かせんとしつつあるのである。

やがてそなたらにもいつか肉の身を離るる日の来るべし、その日のためにも、常に如来の法をよく聴き、仏の慈悲をよく悟りて摩訶男(まかお)の如き心境に至り得るよう、心身を修せねばならぬ。いたずらに嘆き悲しむ愚かなることをせず、生命の光を明らかにせんため、仏心を汚さず、一筋に未来の光明界を信ずるがよい。如来の教を信ずるなれば、何ものをも怖れぬ不退の心境になり得るのである」と法を説かれます。

普通であれば、戦乱で大勢の人が亡くなりますと、殺された人々が、亡くなった後も相手への恨みや恐怖の念を持ち続け、そのままスーッと高い世界に昇華していかないことも多いだろうと思います。また残された人々も長く嘆き悲しみ、その執着の想いが、他界した人々の霊魂の昇華を妨げることにもなります。

しかし、摩訶男(まかお)が、身をもって仏陀の教えを人々に示したことで、残された人々も、真の信仰心に触れて感激して、人間は永遠に生き続ける生命であること、信仰心を持って亡くなった人は光り輝いた世界に往くことがより一層わかり、釈尊の真理の言葉が深く心に入っていったものと思います。

〝釈種の人々は、いつしか親族を失える悲嘆を忘れ、往きたる人の幸(さいわい)と、残れる者の生命(いのち)輝かにこの世に照り渡ることを、仏陀世尊(ぶっだせそん)の大慈愛のみ言葉の中(うち)に、念じつづけていたのであった〟と書かれています。

釈尊が幾多の屍の前で、如来印を結んで合掌され、多くの人が冥福を祈ることで、亡くなった方たちも、大きく浄められたことと思います。

仏教で、一人出家すれば九族救われるといいます。出家とは、業の世界を超えて、御仏の大光明の世界に入れば、その悟りの光が九族（縁者）に流れて行って、みんな救われていく、ということです。

摩訶男（まかお）の大犠牲は、多くの釈迦族の肉体生命を救ったばかりでなく、亡くなった人たちの魂をも救い上げる働きを為したものと思います。

形の世界だけ見れば、これまで繁栄していた迦毘羅（かびら）城が滅亡するという悲惨な出来事ですが、霊的な観点から見れば、釈迦族の過去から積んできた業生が大きく消え去り、釈尊の慈愛の光明の中で、肉体を離れた人も、この世に残された人たちも、大きく浄められ、より真理に目覚めていったことになるわけです。

この後、お釈迦様はマスラに、毘瑠璃（びるり）王の身に、近いうちに大きな災（わざわい）があるとお告げになります。

その言葉通り、この七日後に毘瑠璃（びるり）王は、大きな河を渡っていた時、乗っていた船が沈没して、肉体生命を落とすことになりました。

毘瑠璃（びるり）王は、自分勝手な思いで、多くの人間を殺傷してしまったわけで、普通であれば、亡くなってから、しばらく苦しむことになるかと思います。

しかし最後に、王が摩訶男（まかお）の行為に触れ、自分の行為の誤りに気づいたことで、救われる糸口ができたのは確かであろうと思います。

亡くなった時は、さほど安心立命した境地であったとは思えませんが、釈尊や摩訶男（まかお）、マスラ、大勢の人たちの祈りの光が流れて行くことで、王が生前為した罪業も消え去っていき、真の救われの方向へ導かれていったことと思います。

過去からの因縁因果により、どのような悲惨な状況が現れたとしても、その中に、神としっかり繋がった信仰心が深い人がいることで、みんな救われていくのだということを、この物語は私たちに教えてくれます。

（「小説 阿難」第三部 ４９７～５３３頁、参照）

菩提樹の葉

釈迦族の滅亡と救われ（無料）
2020 年 1 月 26 日発行
著者：尾崎晃久